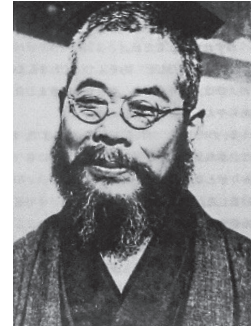


郷土の先人 喜田貞吉博士① (榊刈町)



1910(明治43)年には南北朝正閏論を発表。やがてこれが政治問題化し、文部省休職を命じられることになりました。

徳島が生んだ日本歴史学の偉人、部落史研究の先駆者喜田貞吉博士は、1871(明治4)年、小松島市榊刈町に生まれました。

1919(大正8)年、『民族と歴史』を刊行。これは、『大正デモクラシー』と呼ばれる社会思潮の中で、大きな反響を呼びました。研究号発刊は、時代の要請として受け止められ、社会は部落差別とは何かを学ぶことになりました。そして、被差別の立場にある人々は、自分たちが社会的にどのような立場に置かれてきたのか、位置づけられてきたのかを知るようになったのです。

1899(明治32)年に日本歴史地理学会を組織し、雑誌『歴史地理』を刊行。1905(明治38)年に法隆寺再建論を発表しました。このことが非再建論者らと論争に発展。30余年続いた論争を通して、喜田は、実証主義の歴史学を追究しました。1909(明治42)年平城京および法隆寺再建論等の論文により、文学博士の学位を授与されています。

西光万吉が作成した「よき日のために」というタイトルがついている『水平社設立趣意書』や『水平社宣言』(1922(大正11)年)には、喜田博士の研究号から学んだ多くのことが記載されています。喜田博士の研究号には、「献身的に身を被差別部落に投じて教化に従事した、殉教者の子孫たる寺の住職」という

記述があります。西光は、「祖父も、父も、代々殉教者だったのだ。自分も殉教者になるのだ」そのように受け取って宣言文を起草しました。

このように、喜田博士は同和問題(被差別部落への差別問題)を学問的に解明しようとした先駆者でありました。喜田博士は部落問題研究に取り組んだ動機について、「自分は中学時代に土族や城下町の生徒から、何かについて『百姓』だの『郷中者』(こうちゅうもの)だのと侮辱された。そのような被差別的で苦しい体験が、社会的弱者の歴史(民衆史研究・部落問題研究)へ眼を向けることになった」と振り返っています。

喜田博士の研究の真価と人柄などが水平社運動の陣営からも理解され、喜田は融和運動、水平社運動に携わる人々を勇気づけ、啓発し続けました。

市教育委員会生涯学習課  
人権教育推進室(教育庁舎2階)  
☎ 32・3814  
FAX 33・1230  
✉ jinkenkyouiku@city.komatsushima-tokushima.jp

市民文芸 花みずき歌壇 (421) 山崎泰子・選

朝日浴び竿に弧を描き逆光に黒く輝く釣り人の居て

小松島町 綴木 茂治

ああしんど見るべきものは見ちまった されどオイラは夕陽にや消えぬ

横須町 天王谷 一

手に星を持ちてツリーに飾りつけクリスマス待つ小さな天使

日開野町 森 理子

小春日の田に遊びたる白鷺を車窓に覗く友ら三人と

松島町 萬野 行子

励ましの声の強さにみちびかれ今しばらくの歩みなるかな

小松島町 萬宮千鶴子

透明の真昼のひかり赤み帯び家路たどれば宵闇せまる

前原町 福元 英夫

休日の小学校の校庭に少年の日の夫の幻

松島町 六田 靖子

破られしテスト用紙の復元に先ずは並ぶる直線の緑

中田町 湯浅 百世

五月雨に倒れし氏子を神助かつぐや神輿 妻の目に涙

田浦町 岩田 泰一

実物より色づくしく刷られたる図鑑の蝶は飛ぶことのなし

中田町 松並 敦子